

第2回おきなわ津梁ネットワーク 医療連携研修会・交流フェスタ



理事 富名腰 亮



第2回 おきなわ津梁ネットワークを活用した かかりつけ医の医療連携研修会

第2回 おきなわ津梁ネットワーク交流フェスタ 開催

日時：令和7年11月12日（水）19：00～20：30
場所：沖縄県医師会館・3階ホール

<次第>

1. 開会 沖縄県医師会 理事 富名腰 亮
2. 挨拶 沖縄県医師会 会長 田名 毅
3. おきなわ津梁ネットワークを活用したかかりつけ医の医療連携研修会
 - (1) おきなわ津梁ネットワーク紹介 沖縄県医師会 事務局
 - (2) 当院の取り組みについて 社会医療法人仁愛会 浦添総合病院 医療相談・医療連携支援室 かけはし 室長 親富祖 祐大
 - (3) 津梁ネットワークにおけるクリニックでの活用事例紹介 てだこ浦西駅循環器・糖尿病クリニック 事務長 城間 かおり
 - (4) 質疑・応答
4. おきなわ津梁ネットワーク交流フェスタ
 - (1) 津梁トークの活用事例紹介 沖縄県医師会 事務局

令和7年11月12日（水）、本会館において「第2回おきなわ津梁ネットワークを活用したかかりつけ医の医療連携研修会」および「第2回おきなわ津梁ネットワーク交流フェスタ」を開催いたしました。当日は現地41名、オンライン107名の合計148名が参加し、津梁ネットワークの現状と課題、そして今後の活用の方向性について多角的な議論が行われました。今回の研修会は、県医師会が沖縄県より委託を受けて進めている「かかりつけ医を中心とした医療連携体制構築事業」の一環であり、かかりつけ医療機関と連携病院がより円滑に情報共有し、県民に切れ目のない医療を提供するための基盤づくりを目的としています。

研修会では、まず県医師会事務局による津梁ネットワークの概要説明から始まり、普及状況や接続方式の改善、開示施設数の拡大など最新の取り組みが紹介されました。特にモバイルルーターを活用した新たな接続方式が整備され、診療所や訪問診療の現場でも簡便かつ安全

- (2) 津梁ネットワークの被ばく管理について
 沖縄県医師会
 おきなわ津梁ネットワークアドバイザー
 中頭病院 放射線科医長 有賀 拓郎
 - (3) 当院（急性期病院）における津梁ネットワーク
 活用の取り組みについて
 医療法人 徳洲会 中部徳洲会病院 救急医長
 友利 隆一郎
 - (4) 質疑・応答
5. 閉会 沖縄県医師会 理事 富名腰 亮

に接続できるようになった点は、地域のかかりつけ医にとって大きな利便性向上につながっています。また、救急搬送時の画像連携機能やCTの被ばく管理機能の充実など、医療の質と安全性を両立するための技術的整備も進んでいることが報告されました。

続いて、浦添総合病院およびてだこ浦西駅循環器・糖尿病クリニックから、急性期病院とクリニックの双方の立場から具体的な活用事例が発表されました。浦添総合病院では登録患者数が1万1千人を超え、県内全体の12.7%を占める規模となっています。名寄せ登録の効率化や緊急時参照モードの活用によって、救急受け入れの判断が迅速化し、遠方からの転院がスムーズに行えるなど、実臨床における明確な効果が示されました。退院調整においても検査結果の共有が容易になり、業務負担の軽減にも寄与しているとの報告がありました。

また、開院から間もないクリニックであるてだこ浦西駅循環器・糖尿病クリニックでは、画像共有を中心として津梁ネットワークが診療の質向上に大きく貢献している事例が数多く紹介されました。従来はCDで受け取っていた画像データが即時に参照可能となり、検査結果の説明が円滑に進むようになったほか、離島患者に対する再検査の回避や、検査から結果説明の同日完結など患者負担の軽減につながった例も示されました。

質疑応答では、名寄せ登録をめぐる制度的背景、開示病院側の負担、そして参加医療機関間で利用率に差がある現状など、重要な論点が率直に共有されました。「登録した患者であれば、どの医療機関でも自動的に閲覧できる仕組みが

望ましいのではないか」という指摘に対し、システム開発当初の思想や運用上の制約が説明されるなど、今後の運用改善に向けた議論が深まりました。また、地域連携室の負担軽減や、医師会による名寄せ一括処理の可能性についても意見が交わされ、改善に向けた方向性が示されました。

後半の交流フェスタでは、津梁トークの活用事例として、地域連携室間での名寄せ依頼運用や、大腸癌相談に関する取り組みなど、ネットワークを「気軽に使い始める」ための実践例が紹介されました。さらに、被ばく管理機能については、QST（量子科学技術研究開発機構）との共同開発によりCT検査の線量データを自動解析し、プロトコルごとの線量指標が確認できる仕組みが整備されていることが詳しく解説されました。これは将来的な線量最適化や県版リファレンス線量作成に向けて大きな意義を持つ取り組みであり、患者説明にも活用できる点が注目されました。

中部徳洲会病院からは、救急現場における画像参照の有用性、退院調整システム導入によるFAX業務からの解放、業務標準化の効果など、急性期病院ならではの視点から実践報告がありました。特に、主治医が自ら調整画面を編集できる点は、従来MSWが担っていた連絡・調整の負担を大幅に軽減するという具体的な成果が示されました。また、患者登録数の増加がネットワークの価値向上に不可欠であることが強調され、包括的同意を導入し入院患者から広く登録を得る取り組みについても紹介がありました。

閉会にあたり、多忙のなか参加いただいた県内各医療機関ならびに関係者の皆さまへ感謝を申し上げるとともに、本研修会で寄せられた貴重な意見を踏まえ、津梁ネットワークの更なる発展に向けて医師会として取り組みを継続していくことを表明しました。津梁ネットワークは、県内の医療を結ぶ基盤として、平時のみならず災害時にも重要な役割を担うインフラであり、今後も医療機関の参加拡大とシステム改善を進めながら、県民にとってより安全で安心な医療体制の構築を目指してまいります。